



代替手段から独自の世界を拓くツールへ

小林 史典¹

「見ると聞くとは大違い」というのは、ときどき言われることですが、e-ラーニングについても、表の華やかさと対照的に、否定的な話をときどき聞きます。曰く、教材作りが大変だ、曰く、やはり人間対人間の触れ合いが一番、...。しかし、別の側面に注目する必要があるのではないのでしょうか？ 私はこんな経験をしたことがあります。

e-ラーニングに含めるべきではないかもしれませんが、「メディア」を使った授業の1つに遠隔講義があります。たとえば本学 情報工学部の管理棟の屋上にはパラボラアンテナがあり、通信衛星を使ったSCS (Space Collaboration System) で、いろいろな大学等と講義を交換することができます。私は数年前まで、非常勤の集中講義の半分にこれを使っていました。

このシステムを利用した大きな理由は、集中講義は、やる私も、受ける学生も、朝から晩までぶっ通しで、負担が大変だったためです（小さな理由は、私がSCS事業の運営委員で、実績を増やしたかったことですが ^_^）。この講義のアンケートに私は、

- SCSによる部分は、対面講義に比べてどの程度劣るか

という項目を入れていました。本当は対面でやりたいのだが、という気持ちの表れです。数年間、この項目は、

- 対面より若干劣るが、我慢できる

という回答がほとんどで、まあ大丈夫だな、と思っていました。ところがある年、用意した選択枝（SCSが、対面に比して同等ないしマイナスの項目のみ）をチェックせず、欄外に

- 教官の顔も資料も、講義室よりずっとよく見えるし、SCSの方がいい

と書いた学生がいて、私は目からウロコが落ちました。そういう回答は後にも先にもその1人だけでしたが、対面より遠隔の方がいい側面があるんだな、と新しい可能性を再認識したのです。

e-ラーニングについても同じことが言えそうな気がします。やってみたはいいが、ということでマイナス面が強調され、学習の場所や時間に制約の多い社会人向けに仕方なく、という雰囲気もときどき感じます。しかし、e-ラーニングならでは、というものを目指して、前向きに取り組まなければなりません。

たとえば英語の資格試験として有名なTOEFLは、数年前からCBT (Computer-Based TOEFL) というe-システムに変わってきています。これは、オンラインで採点、集計ができるだけでなく、受験者の

¹副学長 (学生担当)/情報工学部 制御システム工学科・前 e-ラーニング事業推進室長

回答に応じて次の設問を変えるような機能を備えたシステムです。これは明らかに、従来の「ペーパー」テストの代替手段を脱却しており、いわば「個の学習」を支援する新しいツールと言えるでしょう。

e-ラーニングが、生涯教育に基づく新しいキャリア世界の1つの軸をなすことは間違いありません。ごく身近でも、全学の教育方法等開発委員会(通称FD - Faculty Development - 委員会)で、今後のFDの実施形態について、講習会を聞いている時間がないので、e-ラーニング的なものがあると助かる、という意見に多くの賛同がありました。我々自身が必要としているものなら、当然社会に対して積極的に提供する必要があるはずです。

e-ラーニングは、全学的に東京、大阪から距離があり、学内的にも飯塚という、大都市から離れたキャンパスを持つ大学として、グローバルに活動するためにも、不可欠なものでしょう。この特集を1つのきっかけに、今後大きく発展することを期待しています。